

ラムネの客

水野 仙子

路次口の水道から店までの間を、をばさんはバケツを下げて幾度か通つた。カチ／＼と目下駄の音がするたびに滴つて行く水の跡が幾すも残つて、それがすん／＼とびり／＼する日に消えて行つた。

「あ、く、これでやう／＼せよ」とした」

ガチャリと水道の鍵を投げ出して、雑巾を握つて来たをばさんは、板の間にボチ／＼とついた水の跡を拭つて、その序でにそこら中を撫で廻した。

「綺麗になつたらう時ちやん、あゝさつぱりとした」と言ひながら、かぶさつて胸元にたまつた浴衣の襟を、掴みあげて後にやりながら、どつたりと縁に腰を下した。

「もう何時だね時ちやん」と身をひねつて時計を見上げた時、

「もう二時過ぎてよをばさん、まあ綺麗になつたのね」と麻の繪暖簾を割つてお時が首を出した。そして柱につかまつて半身を乗り出すやうに店を覗いて見た。

「をばさんは綺麗好きだからほんとにいいのね」

斜めに臺をして並べた菓子箱には、上等の部にカステラの三角切りや、ワッブルの三つ四つが入れられてある。餡パンもあればトンカチだの衣羊羹だのと、いろ／＼な菓子箱が並べてある。鹽せんべいも硝子を嵌めた鏝の中に見え、光つては居ないが板の間も綺麗に拭き込んである。をばさんが一日掃除を仕事のやうにして居るので、土間の間に土一つ乗つて居ない。

「かう暑くなるおね、直ぐに水が温るんぢやつて仕方がないんだよ。今日はこれで三度取り替へてやつた。ところでんばかりはね、水が濁つてたり温るかつたりしては、喰べられやしないからねえ。時ちやん一杯どうだね、冷たいところを一つお相伴しようぢやないかねえ」

をばさんは寄つた白眼でお時の顔を見上げた。

亞鈴を内側に張つた舟の中に水を堪へて、柏子木なりのところてんが、ぼんやりとした白さを見せて沈んで居る。その片隅には、ラムネの青い壺が六七本漬けてあつた。

「ありがたうをばさん」

と此時、低い靴音が店先をかすめて通つた。鼠の洋服が、ちらりと麥稈帽子の下から振りかへつて、赤黒い顔がお時の白い面々と出會つた時、その男は躊躇もなく引つかへして、つか／＼と店先にはいつて来た。

「いらつしやい！」

をばさんが慌て、立つて店を譲ると、
「随分暑いね」と男は帽子を脱いで汗を拭きながら、椽臺の薄べりに腰を下した。
「ラムネを一本」

「へえ、こんちは随分お暑うございませぬね」
をばさんは愛想を言つて、トンと口を押すと、シユウと泡の騰るのに、コ
ツプを添へて脱いで出した。

「へえの待遠様！」

「實際暑うね」
男はいきなりぐいと仰向けに飲んで、口のあたりをハンカチで拭きながら
臆面もなく先刻から容子を見て居るお時の顔を凝乎と見やつたが、手近かな
舟に手をのばすと一本抜き取つて、

「姐さん如何」と馴々しくつきつけてコトンと板の間に音をたてた。

「有難う！」
お時は顔色も動かさなかつた。一寸會釋して、

「すみませぬね」と暖簾を垂れて
柱を背にしてそこに蓮葉に坐つた。

「御馳走様だね時ちゃん、ぢや抜く
よ」とをばさんが口抜きを懐にあて
ると、男は一本を水から揚げて

「お母さん一つどうです？」

「い、え、私はもう……」

「そんなこと言はないでつき合お
うよ」

「すみませぬねえ」

「をばさん、折角だから頂かうぢや
ありませんか。うん、私あコソブ
なんの要らないことよ、かうするの」
とお時は白い咽喉を見せて仰向けに
懐の口を唇にあてた。

男はそれを氣に入つたらしく見て居た。お時の年は十七八に見える。つく
づく見て居ると、何處か整はないところも出て來るが、色の白いのが目を引
いて、唇の赤いのが何となく人を引きつける。別段、いゝものを用ゐて居ない
が、氣の利いた柄の浴衣が、細い肩のあたりによく似合つて見える。そこら
の取り做しが、年喰らしくも見えるけれど、何しろ小柄なのが若くも可愛い
らしくも見せて居るのだ。

「こゝは随分商ひがあるだらうね、なか／＼人通りがある」と男はお時の顔



から目を放して、思ひ出したやうに握つて居たハンカチで首筋を拭いた。
路次はせまいが、廣い道から廣い路に横ぎる近道なので、忙しげな足音が
絶えず店先に一瞥をくれて通つて行つた。

「此處は何町になつてるのかね？」
「西町よ」とお時はいち早く言葉を取つた。
「そこの天鉄羅屋の角から、かう歩つと此方が西町で、この後手は車坂にな
つてるんですよ」

をばさんは、懐の跡の丸くついた板の間を頻りに氣にして拭いて居た。こ
の太い、密つた眼に利かぬ氣の見えるその不
格好な體を、男はぢろ／＼眺めて居たが、
何かものを言ひたげの風で、お時とをばさ
んとを等分に見くらべて居た。

「お母さんですか？」と遠々口を切つた。
「え？」とをばさんは一寸まごついて、男
の顔を見上げたが、其目がお時の顔から自
分の顔に續いて來たのに悟つて

「い、え」と素つ氣もなく言つて、ちらと
お時の顔に目をやつた。お時の目は微かに
笑つて居た。

「や、どうもお邪魔、また來ますよお母さ
ん」
男は二十錢銀貨をそこに投出すと、開
け放した奥の方に氣を配る風で立ちあがつ
た。

「さしく、貴方が剩錢を……」
「なあにい、よ」

「なんだらうね」
「をばさん！」

同時に似た言葉に、顔を見合して二人は笑ひ出した。

「なんだらう？ 商人かね？」

「うね、洋服は着てるけども、勤め人ぢやないことよ、必と」

「また來るよ、大分思召があるらしかつたぢやないか」

「どうだか」

お時は平氣な顔をして笑つて居た。

「お母さんですかつて言つてたよ、ハ、ハ、」

「フ、フ、二十錢奮發して行つたのね!」

「これからいつも時ちやんに店番を頼まうかね、もうかるよ」

「いゝわさ、だつてをばさん、男つて馬鹿なものをねホ、」

「ほんにねえ、さういへばさうだねえハ、」

「あゝもう四時になつちやつたねえ!をばさん、私今ねえ、月に二十枚入れて貰ひやなんしよかと思つてるのよ、堅い人でさへありあゝ……もう奉公

はいや〜」

かう言つてお時は蓮葉に伸びをして立ちあがつた。

「幾つ位だらうねえ、あんまり若かあないよ」

「何がさ、今んの?」と言つてお時は別段それに答へようとせず、

「あゝすつかり油を賣つちやつたわね、とれ歸つて行水のおぶらでも湧かしませう、をばさん左様なら、御馳走様!」

籐表の日和をつゝかけると、やがて向ふ側の溝板に音をたて、お時の姿は家と家の間に挟まれて消えた。

「どつていしよ、お燈明の油でも見て置ませう!」とをばさんは獨り言をいひく、硝子の玉のコロコロするラムネの空嚔を片づけて、家鴨のやうに動き出した。

そこの底の下の溝板に下駄の音が繁くなつた。豆腐屋のラツパの音が近づいて来る。

目下本誌に連載して喝采を博しつゝある

日本六十餘州を漂らひ歩きたる

老妓の半生實記(浮沈三十年)

は記事輻輳の爲め今回休掲

◎電燈需用者の福音



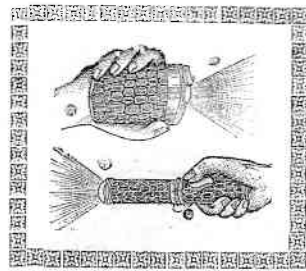
以上既設
キヤ
以下
タイライター

此特許タイライターは電光を明暗何れにも自由に出来る經濟と便利を兼ねたる文明の利器です是非御試し下さい

定價 金九十五錢

電氣煙草盆 五圓五十錢

電氣マツチ 一圓二十錢



(口) 電燈	(乙)	(甲)	(イ) 探見	(丙)	(乙)	(甲)
	二	一		一	一	一
紐付懐中	圓	圓	圓	圓	圓	圓
	同	同	同	同	同	同
	四十錢	三十錢	四十錢	四十錢	四十錢	四十錢

送料各八錢

但し電池は弊店特製「S.H」式乾電池にして光輝純白壽命最も長し
右の外電氣に關する 機械器具一式製造販賣

東京市神田區小川町十八番地(駿河臺下電車停留所前)

本庄商會

電話本局二五八四番
振替口座一九〇六一番

淺草區千束町三丁目三十二番地

淺草支店

電話本局四六五一番

